

令和7年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立緑が丘小学校
-----	------------

1 学校教育目標	自ら学び考え、心豊かに、たくましく生きる子の育成
2 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・生命の尊厳、人権が尊重され、自己肯定感や所属感、成就感を育む学校文化の醸成。 ・個々の実態把握に基づく、心身の調和的発達と個性の伸長並びに学校や社会の一員として主体的に生きる意欲、態度、知識、技能の育成。 ・組織的に取り組む校内体制（システム）とモチベーション、当事者意識とつながりを大切に、風通しのよい温かな学校づくり。

4 自己評価の適切さについての学校関係者評価	<p>【自己評価方法は適切である。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校での取組が、学校評価書の取組（達成）状況にしっかり説明されていて分かりやすく適切な評価と思われる。 ・児童・保護者・教職員へのアンケート結果をもとに丁寧に考察して評価されている。 ・それぞれの評価の観点で評価項目が番号で整理され、番号ごとに達成状況、改善の方策にまとめられているため分かりやすい。 ・今年度の達成状況や来年度に向けての改善の方策が、詳しく示されており、分かりやすい。 ・学校での日々の活動の家庭への周知を工夫することで、より保護者が学校の様子を理解し評価できるようにしてほしい。
------------------------	---

3 自己評価結果（達成状況）（ A：達成している B：おおむね達成している C：あまり達成していない D：達成していない ）

番号	評価の観点	評価項目（取組内容）	取組（達成）状況	評価	令和8年度に向けての改善の方策	5 評価の観点ごとの学校関係者評価
1	学習指導	①学習のゴールに向けた見通しの共有、個別最適な学びと協働的な学びのつながりについての研究推進。 ②認知機能や読解力を高めるためのコグトレ・視写の実施。 ③自己調整力の育成。 ④自治的な活動に向かうため、全クラス学級会の実施。	①学習の流れを示すことで、見通しを持ちながら学習活動に取り組ませることができた。授業の冒頭で、計算練習や漢字小テスト等スキルアップタイムに取り組む、基礎基本の定着を図ることができた。全教員が授業研究を行い、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業の研究をすることができた。 ②毎週、朝タイムにコグトレ・視写に集中して取り組むことで、学習の土台づくりをすることができた。 ③緑が丘小の予習型学習として、次の学習に向けた課題学習や予習に取り組ませることで、自身の学習の充実感や達成感につなげることができた。 ④発達段階に応じたマニュアルを使用することで、話し合い活動が系統的にできるようになってきている。	A	①朝の会の1分間スピーチや終わりの会の三行日記など、自分の考えを書いたり話したりして表現する力を伸ばすことで、個別最適な学びと協働的な学びをさらに充実したものにしていく。 ②コグトレ・視写にタイピングを加え、学習の土台づくりとなる認知力・集中力を高めていく。 ③充実感や達成感に加え、自分に合った学習量や学習内容を工夫し調整していく力を養えるように、取り組みを継続する。 ④発達段階に応じた学級会を実施し、学級や学校において意見の折り合いをつける児童の育成を引き続き図る。	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価 【評価Aは適切である。】 ・個別最適な学びと協働的な学びの適切な実施により、基礎基本の定着と活用の向上が図られている。 ・自己調整力を高める予習型学習など今年度の取組の効果を検証され、来年度の実践に活かされたい。 ・ipadの活用がよくなされている。話す・書くの力も大切にしながら、今後も取り組んでほしい。
2	道徳・人権教育	①自尊感情が高まるような声掛けや、教師と子どものコミュニケーションの充実。 ②生命を尊重し、思いやりで満ちた人間関係の構築。 ③自己の生き方について考える「特別の教科道徳」の授業づくりについての研修。 ④挨拶や清掃、時間遵守等の規範意識や道徳的判断力の育成。 ⑤地域との交流活動や、お世話になっている方への感謝の気持ちをもつ機会の設定。 ⑥緑が丘中学校校区4校が連携した、同和教育・人権教育の推進。	①各クラスのがんばっていることや困っていることを毎月チームス（代表委員会）で共有し、自尊心が高まるような声掛けを行っている。また、低学年から担任同士の交換授業を行うことで、複数の視点で自己肯定感を育てている。 ②全ての学級で、1回目の道徳の時間に、「ふわふわ言葉」「ちくちく言葉」についての授業を行い、学校として大切にしたい価値観の共有をした。6年生では、助産師の方を講師に招き、「いのち」について話を聞き、赤ちゃん人形を抱いたり産道体験したりし、自分も友達もかけがえない大切な命であることを学ぶ機会となった。人権講演会は獣医の方を講師に招き、絵本の読み聞かせ、心音を聞くなどの体験も行い、人だけでなく動物を含めた「いのち」について、全校生で考える機会となった。人権集会は、友だちの発表を聞き、互いを尊重することの大切さを感じさせることができた。 ③長期休業中に講師を招聘した研修会を実施し、親子人権学習のすすめかたについて検討の機会をもった。 ④児童会、代表委員会の児童による挨拶運動の実施、清掃については6年生による「学校ピカピカプロジェクト」や美化委員会児童による呼びかけ等、児童主体の活動を行った。 ⑤友愛クラブや、精愛園との交流など、各学年で様々な学習と結びつけて交流活動を行うことができた。また、2月に「ありがとう集会」を開催し、全児童からお世話になっている方々へ感謝を伝える機会を持った。 ⑥緑が丘中校区で合同研修会をもち、それぞれの取組を交流した。各校の親子人権学習を担当者が互いに参観した。また、合同での現地学習会に参加し、講師の話聞くことで、同和学習教材の理解を深めた。	B	①担任同士の交換授業を継続するとともに、特に高学年は学年を超えたチームでの複数の視点から児童に関わることで、チームで児童を見守ることを継続したい。また、他の教職員の関わりやS・C、通級指導など学校全体と外部機関との連携を強化し、子どもたちの様子に敏感に気づき、いろいろな角度から関わりがもてる機会を増やしていくようにする。 ②6年生の「いのち」の学習は、継続する。自分も周りの人も大切にできるように、家庭と連携して思いやりのある人間関係づくりに努める。「ふわふわ言葉」「ふわふわ行動」を推進し、大切にしたい価値観を引き続き伝えていく。 ③今年度に教科書が改訂になった。より自己との関連で考えさせる教材の選定、授業づくりに取り組んでいく。 ④規範意識や道徳的判断力の向上に向けて、教育活動全体で様々な角度から取り組んでいく。児童が主体的に取り組むやすい挨拶や清掃活動は、引き続き児童会や委員会などの活動を工夫していく。今年度の6年生の取り組みを全校生に伝え、「ピカピカプロジェクト」などは継続していきたいと考える。 ⑤今後も、今年度の実践を基に、各学年に応じたためあてを持ち、取組を継続していく。 ⑥緑が丘中学校校区の4校が人権・同和学習の観点で児童同士、教師間の連携を今後も図っていく。	【評価Aに近いBである。】 ・担任の交換授業などチームで子どもたちにかかわり、子どもたちの良いところや頑張り共有し、皆で育てる実践は評価できる。 ・全学年で「ふわふわ言葉」と「ちくちく言葉」の学習が行われ、言葉の使い方、大切さを自分たちで考え、実践しようとしているのは素晴らしい。 ・登校時の挨拶の様子は地区によって差があるが、6年生が1年生の世話をするなど弱い子を助ける優しさがある。 ・「ふわふわ言葉」が自然に出て「ふわふわ行動」につながる学校づくりをめざしてほしい。
3	生徒指導 安全・防災教育	①みんながよりよい学校生活を送るために、主体的に考え動くことの習慣化。 ②豊かな関係づくりにつながる体験や活動の充実。 ③家庭・地域や関係機関との連携による、いじめや不登校の未然防止・早期発見・早期対応・早期解決。 ④ネットモラル教育等、多様な場面に応じた危機回避能力の育成。 ⑤児童および教職員の防災行動の習得と安全意識の向上。	①当事者意識をもって行動できるように、毎月の生活目標、委員会活動、学級活動などを通して個々の経験値アップや学びを深める機会を設けた。その結果、自分事として捉え、行動できる児童が見られるようになってきた。 ②「緑小ルール10」を年度当初に保護者向けにすぐるで配信を行い、協力を求めるとともに、学級単位で指導を行った。他にも学校行事や日々の教育活動などを通して、児童が基本的な生活習慣や他者を思いやる心、自分を大切にすることを身につけることに取り組んだ。 ③いじめ防止基本方針をHPに掲載し、家庭や地域に広く啓発を行った。また、不登校対策指導員、SC、SSWらと連携し、いじめや不登校児童らへの支援を密に行った。他にも「心の健康観察アンケート」や「心の健康観察」を実施し、児童の内面理解に努めた。 ④年度当初のiPad導入に併せて「みどりっ子iPadの約束」を改訂し、保護者や児童に対する啓発活動を行った。児童の発達段階に応じ、授業などを通して危機回避能力を養った。「メッセージアプリを使いたいじめ」や「炎上を引き起こす書き込み」などへの注意喚起を行い、保護者へトラブル回避に向けた情報提供を行うなどした。 ⑤定期的に火災・不審者・地震訓練などを実施し、児童や教職員の防災に関する意識向上を図った。外部講師を招聘し、地域住民らと協力しながらリアル避難所運営訓練を行い、教職員の防災に関する認識やスキル向上に努めた。	B	①次年度も本校の生活上の課題を踏まえた具体的な行動目標を各月で設定し、主体的に考え動く習慣を身につけさせるための地道な指導・支援を積み重ねる。 ②「緑小ルール10」を年間を通して活用し、学年の枠を超えた体験活動の場を設けたりすることで、豊かな関係づくりのよさを理解させ、多様な人間関係の構築につなげる。 ③日々の児童理解に加え、「心の健康観察アンケート」や「心の健康観察週間」をもとにして児童の心の変化を汲み取り、個に応じた指導を行うことで、信頼関係を深められるように努める。 ④タブレット端末を活用した学習を通してネットモラルやネットリテラシーについての指導を引き続き行う。また、情報機器を「学習」のために正しく使い、安全・安心なインターネットの利用の仕方をも身につけることで危機回避能力の向上につなげる。 ⑤引き続き多様な場面を想定した不審者対応訓練・火災及び地震避難訓練を継続し、家庭や地域と協力しながら災害から命を守るために必要な知識や思いやりの心を育てていく。	【評価Bは適切である。】 ・よりよい学校生活を送るために、子どもたちが主体的に取り組むことができるよう工夫されていることは評価できる。多くの問題行動に対し、即対応する等チームで関わる体制となつていところが素晴らしい。 ・緑小ルール10やipadの約束を保護者にも周知しており、家庭と連携した取組がなされていることもよい。 ・スクールカウンセラーとの情報共有など、連携した体制ができていることは評価できる。 ・予告なしの防災・防犯訓練は子どもたちにいざという時の実践力・対応力を身につけさせる上で大切であり継続してほしい。 ・地域の方による防災・減災の講話を聴く活動が継続して実践され、評価できる。

4	特別支援教育	<p>①特別な支援・配慮を必要とする児童の教育的ニーズに沿う、教材や支援方法の提供。</p> <p>②特別支援教育委員会の開催、学校校務システムの活用などによる、職員間での共通理解ならびに支援体制や支援方法の定期的な検討と、合理的配慮の提供。</p> <p>③特別支援学校との交流及び共同学習や、地域の福祉施設との交流学習における狙いの明確化と、実施方法・内容の検討。</p> <p>④入学や通級、進学に向けての計画的な教育相談や学校見学の実施。個別の教育支援計画・指導計画を効果的な活用した、学校園間の連携。</p>	<p>①教育的ニーズに合わせて、視覚優位の特性がある児童の学習にはカードやタブレットを活用したり、字の習得のために音韻感覚を育てる活動を取り入れたり、自己コントロール力を伸ばすためにアンガーマネジメントを取り入れたりした。</p> <p>②特別支援教育委員会では、学内の方針や児童への合理的配慮について検討した。また、定期的に研修会を開き、PCを活用して同じ資料を見ながら、児童について職員間での共通理解に努めた。</p> <p>③交流及び共同学習に向けて事前計画を立て、関係機関と事前打ち合わせをし、ねらいを共有した。また、総合的な学習の時間などに、児童も事前学習、事後学習を行い、児童の学習が効果的になるよう努めた。</p> <p>④新1年生に向けては入学前の学校見学や入学式のリハーサル等を、新中学1年生に向けては進学先を検討するための学校見学と教育相談を、学校園と連携して計画的に行った。児童の実態については、個別の教育支援計画・指導計画を用いて伝達を行った。</p>	B	<p>①本人や保護者、関係機関から特別な支援・配慮を必要とする児童について丁寧な聞き取りをし、思いや実態、教育的ニーズの把握をする。そこから個々に合う教材や支援方法を考え、教職員間で検討し、適切に提供できることを目指す。</p> <p>②年間計画に特別支援教育委員会を組み合わせ、全教職員が共有ファイルを確認しながら個々の現在目標や手立てなどの共通理解ならびに支援体制や支援方法の検討を行い、合理的配慮の提供につなげる。</p> <p>③より効果的に交流学習が行えるよう、事前学習なども含め、目標を明確に計画的に交流学習を実施する。関係機関と密に連絡を取り合い、互いのねらいを共有する。</p> <p>④入学や進級、進学への流れに沿って、学校園間で連絡を密に取り合い、余裕をもって教育相談や学校見学を行う。また、個別の教育支援計画・指導計画を活用し、有効な支援の共有をするなど、引継ぎを丁寧に行う。</p>	<p>【評価Bは適切である。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校は一人一人の児童に寄り添った支援に組織的に取り組んでいると思う。今後も継続した取組を望む。 ・今後も保護者や関係機関等と十分に連携を取り、互いに理解を深めながら取組を進めてもらいたい。 ・相手の立場になって考える機会を通して、みんなが折り合いをつけて納得できる力を伸ばしてほしい。 ・来年度は特別支援学級の児童数もクラスも増加する。市とも連携して、人員・環境の整備をしてほしい。
5	キャリア教育	<p>①自己有用感や自尊感情の育成。</p> <p>②体験活動の積極的な活用。</p> <p>③キャリアパスポート活用の充実。</p> <p>④推しコン、親子対話などによるキャリア教育の充実。</p>	<p>①児童会を中心に、児童の願いや思いを実現する取組を進めた。「みどりっ子の主張」で感謝の気持ちを相手に伝えたり、「みどりっ子フェス」で全校生の前でダンスやマジックを披露したりした。また、6年生は「給食お助けプロジェクト」を実施し、自己有用感を高める活動に取り組んだ。</p> <p>②各学年、様々な体験活動を行った。3年生は環境体験や醤油について学習、4年生は福祉体験や金物体験、5年生は自然学校、6年生は救急法など、外部機関の専門家と連携した教育活動を積極的に行った。みどりっ子班活動を月に2回行った。縦割り遊びが増え、低学年児童は年上の児童にあこがれを持つ姿、高学年児童は年下の児童のお手本になるうとがんばる姿が見られた。なかよしフェスティバルでは6年生が自主的に創意工夫し、ゲームなどのお店を企画運営した。</p> <p>③県のキャリアパスポートを活用し、年度はじめ、途中、終わりに振り返りを行った。目標を立て、達成度を自己評価し、頑張りやできるようになったことを振り返ることで、自分を見つめ成長していこうという意欲付けにつながっていった。</p> <p>④推しコンでは、憧れを抱くことにより将来への展望を持てるようになった。親子の時間では、自分のよさや頑張りを保護者に認められ、自己肯定感を高めることにつながった。いずれもキャリア教育の一環として将来を見通すことの手立てになっている。</p>	A	<p>①各学年での係活動に加え、児童会を中心とした委員会活動で、児童の願いや思いを実現できる取り組みを進めていきたい。そして、児童の達成感や満足感から、「やってよかった」「次もがんばりたい」との思いを育てていきたい。</p> <p>②体験活動の充実を図るはもちろんのこと、縦割り班活動を継続し、学年を超えたつながりを大切にしていく。</p> <p>③キャリアパスポートやキャリアノートを積極的に活用し、より自分らしい生き方を実現するための基盤となるように指導計画を工夫する。</p> <p>④推しコン、親子の時間は、自尊感情を高め、将来への展望をもつきっかけとなったので、今後も継続していきたい。また、学級指導や授業の中で自分が「できること」「得意なこと」「したいこと」など今後の可能性を含めた肯定的な理解につながる声かけを行っていく。</p>	<p>【評価Aは適切である。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みどりっ子班活動や、6年生・児童会が主体的に進める活動を通して、高学年の子どもたちが活躍し、自尊感情が高められていることは価値のあることである。低学年の子どもたちがその様子を見ることもよい。 ・子どもたちがやりたいと考えて実行できることは大変よい。子どもたちが楽しく取り組んでいることは、評価できる。必要に応じて、PTAの協力を得ることも可能と思う。 ・引き続き子どもたちの自尊感情向上のための取組を工夫願う。
6	家庭・地域等との連携	<p>①各学校園、保護者、地域、関係機関と連携。</p> <p>②地域の人材や教材、施設の活用。</p> <p>③学校通信、ホームページ等による情報発信。</p> <p>④保護者並びに地域の方への授業参観、行事等の参加機会の充実。</p>	<p>①「おはなし会」「ステップアップルーム」「人の目の垣根隊」などの活動で地域の方々にご協力いただき、子どもたちの活動の様子を見取り、児童理解を深めることができた。</p> <p>②花植え・昔遊び（1年生）、環境体験学習（3年生）、精愛園との交流（5年生）、こども園との遊び交流（5年生）やクラブ活動などを通して、地域の方と共にするさとの愛着を深めることができた。</p> <p>③学校通信やホームページ、すぐる等での積極的な情報発信を図った。</p> <p>④感染症対策を講じながら、授業参観、運動会や音楽会など、子どもたちの日ごろの頑張りを参観頂く機会を設けた。</p>	B	<p>①②地域の教材や人材、施設を活用した教育活動を行い、その効果を高める。また、開かれた学校づくりについて努め、学校、保護者、地域、関係機関の連携をより密にしながら教育活動を行う。</p> <p>③引き続き、日ごろの学習や行事の様子について、学校通信やホームページ、すぐる等での積極的な情報発信を行う。</p> <p>④行事やオープンスクールの実施方法が、ふりかえりや実態に沿うように検討していく。</p>	<p>【評価Bは適切である。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の方々や施設との充実した連携が行われている。今後も継続願う。 ・地域での紙飛行機大会には、昨年よりも多くの児童が参加している。 ・PTAの親子行事も工夫されている。 ・学校通信や学年通信、HPで適切に情報発信されているが、保護者からは日々の活動の様子をもっと知りたいという思いもある。可能な範囲で、情報発信増加や啓発に取り組んでほしい。
7	学校組織力の向上 ・ 教職員資質能力の向上	<p>①学校評価や学校関係者評価制度の活用による学校運営の改善。</p> <p>②課題・情報の共有と連携によるチーム力の強化。</p> <p>③業務改善による子どもと向き合う時間の確保。</p> <p>④積極的な研修による教職員のスキルアップ。</p>	<p>①年度当初に学校評価の結果を全員で再確認し、昨年度考えた「改善の方策」を意識して取り組むように共通理解を図った。</p> <p>②ケース会議や各種委員会だけでなく、「Open Share Team だより」（紙面）、Teams（タブレット端末）等を通して、全職員が課題・情報を共有するように心がけ、課題に対しては担任・担当だけでなくチームで対応するようになった。</p> <p>③学期始・末に短縮授業日を設定した。子どもも教師も余裕をもってスタートを切ったり、子どもの様子を見ていねいに見取ったりすることができ、業務改善の一端となった。</p> <p>④一人一授業の授業研究、年間3回の全体研（講師招聘）、道徳・人権教育や特別支援教育についての研修、防災・安全の研修、中学校区での教科等の研修などを実施した。また、個々に専門研修講座やICTの自主研修にも取り組んだ。</p>	A	<p>①年度当初に学校評価の結果を全員で再確認し、学校評価の「改善の方策」を意識して実施できるようにする。</p> <p>②引き続き、報告・連絡・相談を密にするとともに、ICT機器を活用することで情報を全職員で共有し、連携して課題に対応していく。低学年からの交換授業を継続し、多様な視点で児童の実態把握に努めるとともに、生活指導等の課題についてもチームで対応を進める。</p> <p>③校務分掌や学年事務の引継ぎを丁寧に行い見通しをもつことと、校務システムやICT機器を効果的に活用することで、校務・業務の効率化を図り、子どもと向き合う時間を確保する。</p> <p>④ICT教育やキャリア教育、特別支援教育等、課題・ニーズのある領域の担当中心に研修や情報交換を積極的に行っていく。</p>	<p>【評価Aは適切である。】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全職員で学校の状況を共有し、組織的に迅速かつ丁寧に対応されている。継続した取組とともに時代に即した新たな実践にも期待する。 ・来年度も積極的に研鑽を積み、指導力向上に尽力いただきたい。 ・学校評価の結果を年度始めに共有し、取組の工夫や改善を図っていただくとともに、ゴール（年度末の子ども姿）を共有し、見通しをもって一年間の教育活動にあたってもらいたい。